

第五話 はてつづける物語

渡辺公暁

1

奈留と金之助を乗せた展望エレベータは、ゆっくりと上昇をはじめた。金之助の持った巨大な杖が放つ、いまは穏やかな光が、広いエレベータの中をゆっくりと照らしている。屋外ではちょうどよく身を包んでいたコートは、強い暖房のせいで、軽い汗ばみを誘っていた。

「ここつて、ほんとは申しこみとかしなきゃいけなかったんですよね、たぶん」

床に血液でスタンプされてしまう、自分の靴底の断片を見ながら、奈留は気を紛らわせようとしてつぶやいた。

「…しかたない。……だれもいな…かった」

一階の専用エレベータ乗り場には、ふだんは受付になっているカウンターがあつたが、受付嬢もガードマンもい

なかつた。奈留たちはだれにも断らず、エレベータに乗りこんだのだった。

奈留たちが向かう先、アカデミーヒルズは、このビルの四十九階にある、会員制の図書館である。奈留たちはもちろん会員ではなかったが、本を調達できそうな場所は、近くにはそこしかなかった。

「みんな、きつとちゃんと逃げられたんですよね」

希望を持つために出した言葉は、かえつて奈留の気分を沈めた。怪物の無情な爪に人生を絶たれた人々の姿が、次々に頭に浮かんできた。

——あのひとたちは、みんな死んで、

途端に、濃厚な流血の臭いが鼻をついた。嗅覚の幻であることはわかっていたが、奈留は壁にもたれて、吐き気をこらえた。

——私は、あんな中を平気で通ってきたんだ。

一時の興奮に浸つて、修羅場を歩きぬけることができ

てしまった自分を、奈留は信じられない思いで見つめた。

やつとのことで陰鬱な記憶を振り払い、壁から頭を引き剥がす。金之助はそれとは反対側の壁に体を預けて、右手に持った本のページをめくっていた。金之助が、死んだ会社員の鞆から拾い上げた、『蛇にピアス』である。ページを指先でめくるたびに、右手にからみついた杖が揺れて、エレベータの壁にぶつかった。はじめのうち、金之助はそれを気にして、手の角度をあれこれ変えていたが、いまでは本に没入しているのだった。

「金之助さん」

しかし、奈留が声をかけると、金之助はすぐに視線をあげて、睫毛越しに奈留を見た。薄くなった顔色は、さつき見てきた死人に近く、奈留をどきりとさせた。

「あの怪獣をなんとかしても、それで終わりじゃないんですよね？ 口裂け女も、戻ってくるかもしれないし、また別の都市伝説が出てくるかもだし、オルレアンだつ

て——」

「……怪獣…を作った…やつも」

「え？ あれって、都市伝説とは違うんですか？」

金之助は奈留を見ながら首を振る。

「……マンガの…魔法……によって作られた。…ヘデモナ……に選ばれた…やつが、…オルレアン……と協力して…魔法……を使っている」

「そんな——マンガの魔法って、ってことは、金之助さんと同じで、マンガを使ってなんでもできるってことですよね」

金之助はうなずいた。奈留の心のうちに、絶望的な不安が満ちはじめた。口裂け女だけが相手でも、ほとんど殺されかけていた金之助が、それよりもっと奇妙で強力なものに立ち向かえるとは、とうてい思えなかった。

「むりですよ。そんなやつをどうにかしようだなんて、金之助さん、ほんとに死んじゃうかも」

奈留はエレベーターのボタンに手を伸ばした。アカデミービルズよりもっと下の階で降りて、金之助と逃げ出そうとした。

「やめろ」

いつになく低く太い金之助の声が、奈留を制止した。金之助がなんと言ったのかはわからなかったが、恫喝にも似た響きだけで、奈留の背筋はびくりと縮んだ。

「…おおぜいを……殺した男を、……このままにしておけない。…怖い…なら、……四十九階……について…から、……ひとりで逃…げてください」

金之助は、あくまでも本を手に入れて怪物と戦おうというつもりを、明白に示した。奈留は頭が熱くなるのを感じながら、金之助に詰め寄った。

「金之助さんが心配だから言ってるんです！ 怖いのは最初からですよ」

空いていた金之助の左手をつかみあげる。骨ばった腕は

じわりと冷たい。口裂け女がつけた手首の内側の傷口には、醜いかさぶたができていた。指先に乾いた血がこすられて、粉になって落ちた。

「こんな大怪我してまで、金之助さんがやる必要なんかない」

そこで、奈留は言葉を失った。空調の音が、天井から小さく聞こえた。髪が人工の風に吹かれてそよぐのさえ、奈留にはわかった。床についたしみのようなものや、肩と足元で違っている温度や、コートについた毛玉に、奈留は意識を逃がしていた。

ずっと前なら、もつと感情のままに言葉を次々に紡ぎ出せていたのにと、奈留は思った。条理のない、相手を押し倒すためだけの言葉の濁流は、頭の中にできた堤防がせきとめていた。堤防はコンクリートではなく紙でできている。金之助との体験と、ほんの数度の読書とが、奈留に強固な堤防を築きあげ、引き返すことのできない

理性の足かせをはめていた。相手はどう思うのか？ 言葉に関して圧倒的に弱者である金之助は、自分がたくさん言葉を吐き出すとき、どう感じるのか？ 理性的な問いかけは一度考え出すとこだまのように奈留の体内を駆けめぐり、口は外部ではなく内部で話しつつけるほかなくなる。奈留はあえて理性を遮断して、思ったとおりを伝えようとした。しかし奈留の理性はいまや、感情を容易に押さえこめるほどに、いやらしく肥大化していた。

金之助は他人の言葉を懸命に並べて、自分を話す。

「…魔法……というのは、……いままで私が…信じていた……論理体系……を反故にする…ものだ。……ぼくは……もつと安心して…暮らしたい。……いままで信じていた……物理法則……に安住し…ていたい。…だからぼくは……この…杖……を捨てたい。…それには…すべての……魔術を否定する…しかない」

金之助は右手にからみついた杖を持ち上げた。奈留の顔

のすぐそばにある杖頭の表面を、無数の文字が虫のように這い回っている。

「…それに、……思春期の少年…が、…考えを…形にできる…魔法……を手に入れ…たら、どうする…と思おう？」

握った金之助の左手が、かすかに動いた。奈留は戸惑ったが、金之助の言わんとしていることは理解できた。奈留は手の力を緩めながら、少し後ろに下がった。二人の手はゆつくりと別れた。

「…だから……こんなものは、…捨てたい。恋の味の前じゃ、魔法なんて、後ろめたいだけだ」

金之助はむりやりに大きく息を吐いた。後半は悟られないために、わざと引用を用いずに言ったように、奈留には聞こえた。

「え？ 何の味？」

「……忘れて」

血の気が戻った表情も、奈留には見えていた。金之助は左手をコートの広いポケットに収め、階数表示へ視線を逸らした。杖が放つぼんやりした光が、ランプの色を歪ませている。

「…そういえば、…ぼくを……襲っていた…のが……口裂け女…だつて、……よく気づ…きましたね」

あからさまな話題の切り替えだったが、言われてみれば不思議だった。赤い服の大女の姿を見て、とつさに頭に浮かんだことで、根拠はなかった。

「なんでかな——思いついたんですよ、口裂け女だつて。最近、都市伝説のことばかり考えてたからかも」

エレベータの大きな窓から、夕日が半分差しこんでいる。

「でも、また口裂け女が来ても、すぐに追い払えますよね。ポマードつて三回言えばいいんだし」

しかし、金之助は首を振った。

「…口裂け女…の……第一の……武器は、…速度。…引

用……を読み上げる…前に、……口を…裂け…る。…さつき…うまくいった…のは、…口裂け女…が……月ノ夜…さん……に気づいて……なかったから」

「じゃあ、次に口裂け女が来るときは、ポマードつて三回言う前に、あの鎌でやられちゃう、つてことですか」
万能だと思っていた魔法も、唱えるまでは無力であることに、奈留は思い至った。

「なら、犬つて文字を手を書いて見せる、つていうのもありましたよね。べつこらあめを食べさせるつていうのは、持ってないからむりですけど」

金之助はほかにもいくつか、口裂け女の好物を並べた。

「……マスカットキャンデー、…チョコレート、…その他いろいろ。……こういう…対処法……の共通点…つて、…わかる？」

「さあ——」

整髪料、犬、菓子類、並べて考えてみても、何かつなが

りがあるようには思えなかった。

「…口が……耳まで裂けている。……人間…より……動物に近い……特徴……だと思いませんか」

耳と唇の端の距離でいえば、耳が下にある人間のほうが近い。しかし、鼻が前に突き出している動物は、そのぶんだけ唇が奥まで伸びているように見える。

「…ポマード…の……強烈な臭い…を嫌い、……食べ物…には……強い興味を示す」

「それに、走るのも速いし、ほんとだ、ぜんぶ、動物の特徴ですね！　じゃ、犬って文字を見て逃げ出すのは？」

「……正体を見破られ…ると、…逃げ出す……妖怪譚は……ざらにある」

「口裂け女の正体は、犬だったってことですね？」

そのとき、窓から入ってきていた夕日が遮られた。窓を見た奈留は、思わず声をあげて金之助のそばに身を引い

た。

窓の外を、エレベータと同じ速度で上昇しながら、「正義の味方」超人マンとなった高橋が飛んでいた。顔に巻きついてたマフラーは、風になびいて首もとにずり落ちている。

「高橋くん！　怪獣やっつけたの？」

高橋は大きく身振りをしながら、何ごとかを叫んでいるが、窓の厚みのせいで、内容は聞き取れない。しきりに下を示しているのはわかったので、奈留はうなずいて、窓際に顔を寄せ、眼下を探った。

銀色の怪物、超獣ギーガーが、エレベータの真下を這いのぼってきていた。鋭い爪をビルの外壁に突き立て、太い牙を剥き出して、巨大な怪物はぐんぐんとエレベータに迫ってきていた。

「……まずい」

金之助が奈留の隣にきて、怪物を認めてつぶやいた。

窓に額をつけると、かすかに高橋の怒鳴り声が聞こえた。奈留は右の耳を窓につけた。高橋もそれに合わせて、飛ぶ高さを揃える。サイレンに混じって、

「早く降りろ！ エレベーターじゃ危ない！」

と叫んでいる声が聞き取れた。

「……消防車」

下を見ていた金之助がまたつぶやく。見ると、怪物の下に、梯子のついた消防車の赤い車体が、続々と集まってきた。高橋もそれに気づいて、飛ぶ姿勢を変えながら下を見た。

「どうするつもりだと思います？ 消防車」

「……放水」

「放水？ そっか、水をかけて、怪獣を落とすつもりなんですね」

金之助は、目の前の高橋に、ガラス越しに早口で叫んだ。

「『我々が世の中に生活している第一の目的は、こう云

う文明の怪獣を打ち殺して、金も力もない、平民に幾分でも安慰を与えるのにあるだろう』！ 夏目漱石、『二百十日』」

高橋は一瞬眉根を寄せたが、すぐに了解して、体の上下を反転させた。めくれかえった上着がふわふわと動く。

金之助と視線を交わしてから、高橋は怪物めがけて飛び落ちていった。

「……消防士…や警官…では、ただ……殺される…だけ」

金之助は『蛇にピアス』を肘ではさむと、コートの内側に、杖のからみついた右手の先を入れて、内ポケットからボールペンを取り出した。

「…もうすぐ……四十九階」

左手のひらに、慎重に「犬」と記しながら、金之助は白い扉の前に立った。

「口裂け女が、待ち伏せしてるかもしれないですね」

エレベーターが止まる。奈留は体に慣性を感じながら、息をつめて身構えた。扉が真ん中から二つに割れる。金之助は文字を書いた手のひらを突き出し、襲撃に備えた。

広くとられたエレベーター乗り場には、だれもいなかった。背の高い観葉植物の鉢植えが三つと、壁沿いに並んでいるきりである。奈留は思わず体から力を抜いたが、金之助は警戒を怠らず、姿勢を保ったまま、左右をうかがいながら歩き出した。

「ポマード、ポマード——」

繰り返し唱えながら、奈留もおそるおそる、エレベーターを降りた。照明はエレベーターの中よりは薄く、暖かい色をしている。案内板によれば、目の前の自動ドアの向こうにある部屋が、アカデミーヒルズなのだった。白く背の高い本棚が見えるが、中に人影は見当たらない。

金之助は緊張していた肩をやっと下ろして、自動ドアに近寄った。センサーが反応して、ガラス戸が右へずれ

る。

その瞬間であった。口裂け女の後ろ姿が、叩きつけるように現れた。赤いハイヒールが鋭い勢いで床のじゅうたんとこすれ、こもった音をたてる。奈留たちの気づかない位置から、奈留たちの気づかない速度で、怪人は走ってきたのだった。

「来たね」

抑揚がずれた奇妙な声で、口裂け女は背中を見せたまま言った。奈留は早口で繰り返した。

「ポマード、ポマード、ポマード」

だんだん声が悲鳴に近くなっていくのが、自分でもわかった。

「うそ、どうして効かないの」

口裂け女は赤いレインコートの肩越しに、金之助に何かを投げつけた。とつさに身をかかわした金之助の足元に、まとまってぽとりと落ちたものは、二つの切り取られた

耳であった。

「……聴覚を」

「そんな」

怪人はおぞましくも、自らの耳を切断し、聴覚を失うことで、ポマードの呪文から身を守っているのだった。

奈留は怖気に全身を支配されながら、金之助の背後に隠れた。金之助は左手の「犬」の文字を掲げた。口裂け女は振り返りながら、両耳のもとであった場所に手をやった。長い髪の毛のあいだに、白い糸のようなものが耳から垂れているのを、奈留は見た。白髪と言うには少し太い。怪人は髪をかきあげ、その二本の糸をつかんだ。もぎとられた耳から血が垂れ、糸を伝っていた。怪人は紅白のまだら模様になった糸を、下に強く引いた。

「うそ」

糸がぷつりと切れると同時に、口裂け女の眼球がはじけた。耳に空けたピアスの穴から出てくる白い糸を引っぱ

つてみると、視神経が切れて視力を失う——「ピアスの白い糸」なる都市伝説が、都市伝説自身の体に再現されていた。

生卵を潰したようなおぞましい音を、奈留はまともに聞いてしまった。金之助は左手を口裂け女の顔の前に押し出したが、どのような文字がそこにあると、もはや口裂け女には見えていない以上、効果はなかった。大きなマスクに、毛糸のような鮮血が四本、太く流れ落ちた。ぶよぶよと落ち着かないまぶたには、白い液体も飛び散っている。水分を失って急激に萎縮した、破裂した眼球の破片が、うつろな眼窩の奥にあった。

「私って、きれい？」

怪人にグロテスクな顔を向けられ、体が意思を無視して震える。歪んだ泣き顔の奥で嗚咽を漏らしながら、奈留は必死でうなずいた。口裂け女は右手の鎌をゆつくりと振り上げた。

「これでも？」

威嚇の声とともに、耳まで裂けた口はマスクを超えるほどに大きく開き、血に染まったマスクを飲みこんでしまった。怪人の本性があらわになる。目と耳を失い、まさに口の化け物となった怪人は、腰を落として両手を床についた。尖った歯のあいだから、唾液がこぼれた。

「金之助、終わりだ」

四つの足を恐るべき速さで操り、口裂け女は金之助に躍りかかった。耳の部分が血で汚れた長い髪が、尾のようになって跳ね上がった。金之助は杖を怪人に向けながら『蛇にピアス』を朗読しようとした。

「金原ひとみは、」

しかしその余裕を与えず、怪人の左手が金之助の肩をつかんだ。勢いに押され、金之助は奈留の目の前で、仰向けに倒される。

「金之助さん！」

悲鳴は廊下に響き渡っただけだった。金之助の上で獣のように四つん這いになった口裂け女は、右手を振り上げた。その指の中で、鎌がくるくると回った。奈留はそれだけで股の力が抜け、座りこんでしまった。口裂け女は金之助の顔に鼻を寄せ、すりつけるように動かした。

「ここが口か」

赤く伸びた長い舌で、口裂け女は金之助の頬を、すつとなでた。金之助はなんとか逃れようともがいたが、足をハイヒールで押さえこまれ、細長い指で首を絞めつけられると、苦しげにうめくことしかできなくなった。

「——こう——書いて——いる——」

「死ね！」

鎌が勢いよく動き、血と悲痛の声とが飛び散った。奈留は手で顔をかばおうとしたが、指の隙間から見える切り裂かれた頬から、目を逸らすことはできなかった。狂ったような女の笑いが、奈留の耳をさいなむ。金之助は唇

と舌を動かした。だらだらと血が流れる頬の裂け目から、雨だれのようなかすかな音だけが出た。

口の裂けた金之助に覆いかぶさったまま、口裂け女は紅のマニキュアがなされた爪で金之助の体をなぞり、心臓の上をつついた。

「直接食い破ってやる」

金之助の杖を持った右手を、以前やったように鎌で床に固定し、口裂け女は下顎を広げた。気味の悪い色をした歯茎に、耳からの血が垂れている。

奈留を包む汗は、いつのまにか冷たいものになってしまった。上半身を支えていた腕の震えが大きくなる。床に崩れ落ちそうな背中を維持するために、奈留は足をばたばたと動かして、床に尻をついたまま後ろへ下がった。じゅうたんが剥き出しの腿の裏側を引っかく。その感触が背筋をぞわりと駆け上がり、奈留は大きく身を引いた。指先が皿状のものの縁にぶつかった。

——鉢植え。

奈留はばねのような勢いで立ち上がると、観葉植物の幹を両手で握って、プランターごと振り回した。ふらつく腰を壁に押しつけ、奈留は白い鉢を、口裂け女のレイコートの尻に、横薙ぎに叩きつけた。

蛙のような声を吐き出し、口裂け女は金之助の上から飛び離れた。黒く長い髪が空中に広がる。勢いのまま、プランターは奈留の足元に戻ってくる。土がぼろぼろとこぼれ、金之助の腹にかかった。

肘より肩が下にある、爬虫類じみた姿勢で、口裂け女は首をぐねぐねと曲げ、奈留を見上げた。潰れた眼球の片方が、血液にまみれてぼろりと落ちた。

奈留はがたつく背中を壁で支えながら、狂乱のうちに、二度、三度と、観葉植物を左右に振った。コートの裾や肩にかけた小さな鞆が、奈留のまわりで揺れる。しかし、土が新しくこぼれるばかりで、口裂け女には届かない。

怪人はいつそう体を床に沈め、じゅうたんを噛まんばかりの姿勢をとった。つららのように並んだ牙が、一瞬の跳躍ののちに自分の首をちぎるのを想像すると、頸動脈の律動が、音のように大きく感じられた。

赤く長い爪が足元から飛びこんでくる。奈留は観葉植物を力なく放り投げ、身を床に縮こませた。

金属的な一拍が鳴った。口裂け女は咳に似たうめきをあげ、もんどりうって床に転がった。突撃を遮ったのは、倒れたままの金之助が差し上げた、本をかたどった杖だった。起き上がった口裂け女は、鼻を使って方向を確かめながら、いまいましげに叫んだ。

「なんでだ、右手は使えないのに」

右手首は、口裂け女の鎌で床に押さえつけられていたし、杖も右手にからみついたままだった。奈留の前で揺れている杖頭は、右手の杖のものとは違い、全面黒塗りの本を模していた。表面を這い回る文字の洪水もない。

「……『彼の舌は本当に蛇の舌のように、先が二つに割れていた。』」

左手を差し上げて寝転がったまま、かすれた声で金之助は言った。金之助は右手を動かさないようにゆっくりと体をひねり、左手の杖の黒い杖頭を、そつと鎌に触れさせた。輝く杖の柄と、光沢さえもない黒の杖頭とに挟まれると、途端に鎌は鋭さを失い、粘土のように形を変え、厚手の古びた本になってしまった。その本もまた黒い表紙をしてはいたが、金之助の左手の杖の色にはとうてい及ばなかった。『蛇にピアス』の魔法によって作り出された、新しい左の杖には、わずかな青の混入もない漆黒が、堂々と鎮座していた。杖頭から伸びた細い糸のような柄は、金之助の手のひらに幾重にもからみついており、そこだけは太いベルトのようなありさまだった。

金之助は自由になった右手をついて立ち上がり、口裂け女と対峙した。金之助の頭の右半分だけが、右の杖の

光彩に照らされている。奈留はそれを、床にしやがみこんだまま見上げた。

「それって——」

奈留に背中を向けたまま、金之助は答えた。

左の口が言った。

右の口が言った。

「陰の杖、コーカイテイル
ゼ。裂けた口と舌があれ
ば、口を分割して二つにで
きる。同時に二つの魔法を
使えるということだ」

「陽の杖、コーカイテイマ
スです。コーカイテイルが
本で現実を変えるように、
この二つの杖は現実を本に
変えられます」

金之助の声が二つ、同時に放たれた。やけに滑らかに流れる声は、引用からなるふだんの言葉とは違っていたが、奈留にはその意味がはつきり聞き取れた。まだ背中しか見えないため、口を分割するという意味はよくわからなかったが、そのせいで金之助の生来のどもりが消えたのかもしれないと、奈留は思った。

口裂け女は頭をぐるぐると動かすのをやめた。動物的嗅覚で、立ちふさがる金之助をかぎつけたのだった。金之助は一歩足を前に出した。革靴の先が、鎌であった本に当たった。本はじゅうたんの上でわずかに滑った。

「コレデモ」

脈絡をなさない威嚇の聲が、口裂け女の歯のあいだから絞り出された。腕と足が車輪のように動き回る。蜘蛛に似た動きで、怪人は一気に金之助に肉薄した。

左の口が言った。

右の口が言った。

「ジャン・パリスは『空間
原理——』で、こう書いてい
はすでに征服することであ
ることを確立することにほかな

「と視線——西欧絵画史の
ます——『見ること、それ
り、対象物の魔術的所有権
らない。』」

二つの口から放たれた、呪文のように意味をなさない言葉は、口裂け女の眼前で一つに合成された。分業によって、倍の速度で読み上げられた文章が、杖のもとで再生

した。金之助の足元の、鎌が変形した黒い本から、文字の洪水が噴出する。それらは二つの杖に残らず吸いこまれた。口裂け女が処刑の一閃をふるう、そのほんのわずか手前で、コーカイテイマスがまばゆく輝き、コーカイテイルゼが光を食した。

異常な明るさと暗さが終わり、奈留は目を開けた。金之助の喉に爪をかけたまま、口裂け女は硬直していた。鼻先に近づいたおぞましい顔をひきつらせているのは、いまは金之助ではなく、口裂け女のほうだった。口裂け女の身体の「魔術的所有権」はいまや、口裂け女自身ではなく、金之助の視線にあった。

金之助は一步下がって、魔手から首を離したが、怪人はなおそこに立ちすくんでいた。両腕を突き出した姿勢は変わらない。その動かぬ細い腰をめがけて、金之助は左右から、二本の杖を打ちつけた。口裂け女はついにぶよぶよと溶け崩れ、どぎつい赤さも鋭さも失って、児童

向けの本になってしまった。地面に落ちた本を拾わず、金之助はゆつくりと振り向いた。

奈留はこのときやつと金之助の顔を見て、口を二つに分割するということの意味、その奇怪な形を理解した。

頬まで切り裂かれた傷口は、そのまま開いており、奥歯がどれも外から見えるのだった。唇の端から端までが、ふだんの倍ほどの長さになっているのである。

金之助が口を開けると、右の切り口と左の切り口から、それぞれ細い舌が見えた。もとあった舌が、根元から二つに分かれているのだ。左右の口のあいだを垂直に仕切っているのは、魔法によつて現れた、粘膜のようなものだった。奈留が見る限りでは、粘膜は唇の内側からはじまり、口蓋をも左右に分割していた。鼻腔のあいだにある軟骨が、口の中まで降下してきたようでもあった。

したがって二つの口は、臼歯が前歯の役割を果たすといういびつなものであり、そこから出る二つの声が、どちらも金之助のふだんの声と変わらない音を保っている

のは、まさに魔法の作用といえた。

奈留のおびえた表情に気づいて、金之助は何か言おうとした口を閉じ、また後ろを向いた。

「あ——ごめんなさい」

自分の露骨な態度を気まずく思いながら、奈留は立ち上がった。腿の震えはまだ小さく続いていた。

金之助はコートの袖で、口の周りの血をぬぐった。そして、左の口で言った。

「醜い顔を見せて申しわけない。でも俺はこんな顔になってもいいから、自分の言葉でだれかと——いや、あなたと話してみたかった。俺の姿なんか、見てくられなくてかまわないから、声だけでも聞いてほしかった。俺の気持ちを俺の言葉で伝えたかった」

して、右の口で言った。

「いままでどもりに悩まされてた原因が、やっとわかりました。要するにぼくは、いつべんに別のことをしゃべろうとして、それで混乱してたみたいです。でもぼくは、それができるようになってしまった。いま人並みに発音ができていますのは、そのおかげです」

二つの言葉を注意深く聞き取って、奈留は微笑した。

「私にはちゃんと聞こえてるし、わかります。きつともう、魔法が解けたあとでも、金之助さんはちゃんとしゃべれますよ」

金之助は照れくさそうに頭をかいた。

「ありがとう。こんなにうれしいのは久しぶりだよ。しゃべるってこうやるんだなってのが、どんどん体に染みこんでくる感じた」

「原因に気がつくのに、時間かかりすぎですけどね。それに、月ノ夜さんがいなかったら、ずっとわからなかったと思います」

ぼろぼろになった黒いコートの内側で、興奮が渦を巻いているのが、奈留にもよくわかった。金之助が自分より一つ年下であるのを、奈留はいまさらながら思い出した。神秘を冷静に使いこなす、奈留の命を何度となく救ってきた金之助は、しかしまだ少年にすぎないのだった。

アカデミーヒルズへの自動ドアを開けて、金之助は二

つ口で言った。

「急ごう。時間はあまり残
ってない。俺はもう決め
た！ 今日じゅうに、五時
に魔法が終わるまでに、決
着をつけてやる」

「とにかく片っ端から本を
集めてください。持ち運ぶ
のに大きな袋もほしいで
す。リュックは破られてし
まいましたから」

2

警官や消防士たちは、怪物と、そのまわりを飛び回る高橋を見上げて、右往左往していた。新しく現れた飛ぶ男の処遇に困っているのだろうと、高橋は思った。消防士が怪物の興味をひき、金属の爪の餌食となる前に、なんとかしなければならぬ。

高橋はいったん高く上がり、松沢から借りた、顔を隠すためのマフラーを、頭の後ろでしっかりと結んだ。痛めてしまうかとも思ったが、背に腹は代えられない。そ

のうち新しいのをプレゼントしてやろうかと考えながら、高橋は怪物の尻尾に狙いを定めた。

奈留たちの乗ったエレベータは、目的の階で止まっている。着々とそこへ近づきつつある怪物の背後へまわって、高橋は金之助の引用を思い返した。「機関車よりも力が強く」——飛行能力や超人的な視力は実感していたが、筋肉が増えたような感触は、まだなかった。しかし迷ってもいられない。ぶつかっただけの衝撃からして、怪物の巨体はかなりの重さがあるはずだが、それを持ち上げるだけの握力や背筋力が、いまの自分にあるのかどうか、高橋は試してみることにした。壁を着々と這いのぼる怪物の広い背中を、高橋はなめるように目で探った。

怪物の腕は流れるように動き、背中には筋肉の存在が感じられない。あるいはすべてが筋肉でできているのか。高橋は水族館で見たタコを思い出した。

体全体が揺れている尻尾の動きを読みながら、足首の

角度を変えて、飛びかたを調整する。両手を大きく開いて、高橋は下向きの放物線を描きながら、銀色の太い尻尾の先端へ突進した。

冷たい金属の感覚を押しえつけ、高橋は尻尾を握りしめた。怪物はビルに取りついたまま、よじのぼるのをやめて振り向いた。巨大な顔がぬつと動き、高橋を見下ろす。爪に引っかかれれば、深手を負うことは確実なので、高橋は怪物が手を壁から抜く前に、尻尾を握ったまま後方へ飛んだ。

脱臼も覚悟していたが、肩にも腕にもほとんど負担はない。高橋に引っぱられた巨体は、ガラスを数枚よけいに砕いて、ビルからはがれた。怪物はひどく高音の雄叫びをあげる。高橋は本能的な悪寒をこらえながら、自分を中心にして、怪物を空中で振り回した。

怪物は尻尾を丸め、先端にしがみつく高橋に爪を届かせようとしたが、遠心力がそれを阻む。怪物は両手両足

をあげた間抜けな格好で、空気をかきまわしながら大きく回転した。夕日が数瞬おきに怪物を照らし、またたくようにきらめかせた。頭から離れない野球帽のつばが、高橋の目を守った。

高橋は改めて「正義の味方」超人マンの力を実感した。これだけの巨体を自在に扱っても、体がきしむことはない。汗をかいているのは緊張のためだ。しかし何度も回転を続けるうち、目が回りそうになってきたので、高橋は地上を探した。怪物を投げ飛ばしてぶつけるのに好都合な、尖った先端を持つコンクリートのオブジェが、少し離れたところに見つかった。高橋は怪物の爪に気を配りながら回転を続け、タイミングを見計らって、手の力を抜いた。

勢いは予想以上についていた。怪物は手足をばたつかせながら吹っ飛んでいき、狙いあやまたず大きな針に串刺しになった。電車が急停止するときのような音が響く。

灰色の尖塔は、後頭部を貫き、怪物の顔の中心に顔をのぞかせた。それはどこか雪だるまの鼻に刺さった人参を思わせ、高橋はマフラーの内側で笑った。

地面に叩きつけられ、怪物は動かなくなった。高橋の目は、怪物の爪先がぼろぼろと崩れていくのを見つけた。もとの大量のプルトップへと分解していくのだった。

「勝った」

嘆息とともにそう言ってみて、はじめて感動が湧いてきた。高橋は飛びながら何度も宙返りをした。

「勝った勝った！」

怪獣を打ち殺してやったぞ、と、高橋は金之助のいるはずの場所を見やった。

警官が怪物の残骸に集まってくる。新しいサイレンの音も近づいてきた。高橋は建物の影に隠れるように飛びながら、ポケットから携帯電話を取り出した。五時までにはもう少し時間がある。奈留に連絡をとろうとしたが、

高橋は奈留の携帯電話の番号を知らなかった。ならばと松沢にかけてみると、回線が混みあっているというメッセージが流れた。怪物の出現は、すでに大きな騒ぎになっているのだった。

怪物のほかにも、口裂け女という化けものがいたはずだった。のんびり空中遊泳を楽しんではいけない。高橋はなるべく高く体を浮かせ、金之助のいるビルの四十九階へと、上空から回りこんだ。

アカデミーヒルズでは、気に入った本を購入して持ち帰ることができる。そのため、カウンターに紙袋が置いてあった。奈留はそれを目ざとく見つけ出して、いちばん大きいものを選んだ。

金之助は、はじめのうち独特の分類形式に戸惑っていたが、いまは手当たり次第に本を棚から落としている。

いくら本があろうと、読んだことのない本は魔法に使えないだろうとも奈留は思ったが、金之助の態度からすれば、ここにある本ぐらひはすべて読んでしまっているのかもしれない。

金之助の杖は手のひらにからみついているため、どこかに置いたり片手を空けたりはできない。背の低い金之助にとって、高いところのものを落とすには都合がいいが、落とした本をしゃがんで選別する際には、明らかにもてあましていた。

金之助は数冊の雑多な本を抱えあげたが、しばらくしてそのうちの二冊を床に置き、別な本と取り替えた。

「『何か文章を引用しようとして探している人の様子で。』メリメ、『ドン・ファン異聞』」	「引用するために本を探すなんて、不純ですよね——なんて、こんなこともいまなら、自由に言えます」
--	---

奈留は念のために複数種類の紙袋を集め、重ねて持って

いった。紙袋にはこの複合施設のシンボルマークが印刷されている。

「これ、どうぞ」

悪いとは思いながらも、奈留は金之助の顔からなるべく目をそむけ、紙袋を渡した。金之助はしゃがんだまま紙袋を受け取り、いちばん大きな袋を二つ選んで、それに本を詰めこんだ。金之助の選んだ画集のような本は、その袋でなければ入らないのだった。

「ありがとう。それと——	「じゃ、そろそろ行きます。
--------------	---------------

いや、なんでもない。生きて帰ってこれたら言うよ」	高橋さんと連絡とって、いしよに逃げてください」
--------------------------	-------------------------

奈留はそのとき強烈な既視感を覚えた。死地から生還するまで保留される告白、それは、金之助があれほど嫌っていた、ありふれた言葉、言い古された慣用句、他人の表現ではなかったか？

口元を腕で隠しながら、金之助は立ち上がった。多く

の傷のせいで、顔色はひどく悪い。その中で、黒いコートの裾の上に並んだ双眸だけが、力強く熱く濡れていた。

「金之助さん——いまここで魔法を使って、その、マンガの魔法を使うやつをどうにかするわけにはいかないんですか？魔法なんだから、相手に近寄らなくたって」
金之助はうつむいて、小さく首を横に振った。

「前にも説明したけど、魔法はいつも都合よく使えるってわけじゃないんだ」
「まあ、試しにやってみましょうか。うまくいったらもうけものですしね」

金之助は紙袋に入れていなかった本を一冊取り上げた。

「俺は魔法で何かを希望するだけだ。それに応えて何が起こるかどうかは、俺じゃなくて、あのヘデモナが決めることだよ」
「松浦理英子は、『葬儀の日』で、こう書いています——『私はイメージだけであなたを殺すことができるのだ。』」

右手の杖の輝きは、変転を間断なく続けている。朗読が

終わったあとでも、本には何も起こらなかった。

「だめ——みたいですね」

「ただ、相手の魔法にも同じ制限はあるはずだ。俺もまだ殺されてないから」
「簡単にはいかないつてことですよ。物語としての面白さが基準らしいですが」

金之助は紙袋を両手に持って、窓際に行った。プラスチック製の持ち手がずつしりと食いこみ、また腕の傷口が開いた。気味の悪い顔が映っている窓を、金之助は二つの杖で同時に叩いた。途端に窓は消え失せ、本となって床に落ちた。本の角が床に当たって音をたてる。

窓ガラスのなくなった場所から、外の冷たい風が吹きこんでくる。奈留は風の届かない位置に動いた。金之助はやわらかい栗毛を風に任せながら立っている。

夕空のあいだを、ふわふわと浮かびあがってくるものがあつた。

「月ノ夜さん！ 怪獣やつつけてきましたよ」

高橋が奈留と金之助の姿を遠くから認め、飛びこんできたのだった。奈留は窓に走り寄り、野球帽の下の誇らしげな顔に手を振った。

金之助は数歩下がって、高橋が入ってくる余地を作ってやった。窓がなくなった場所の前の空中で、高橋は止まって、金之助のひどく歪んだ顔を凝視した。

「お前——そうか、金之助か。すごい傷だな、だいじょうぶなのか？」

金之助は降りるように指で下を示した。

「もう魔法を解いて、飛べないようにするから、早くこつちに降りてきて。俺にはまだ、なんとかしなきゃいけない相手がいる」

「お疲れさまでした。おかげで本も手に入りましたから、これ以上巻きこむわけにはいきません。月ノ夜さんと逃げてください」

口の右半分と左半分がぼらぼらに動くさまを見て、高橋は目を見はった。奇怪なうねりは奈留にも見えた。単眼

の顔が二つ同居しているようでもあった。

金之助がさらに数歩下がると、高橋はおっかなびつきりといった様子で、裂けた口と距離をとりながら、建物の中に降り立った。足を落ちつかげに動かして、床の感触を確かめながら、高橋は言った。

「おれはもう手伝えないのかな？ 怪獣にだって勝てたわけだし、まだ協力できることはあると思うけど」

金之助は管えずに、右手の杖を床に一つついた。本をかたどった杖頭が、本と同じように開いた。ページのはためきは鳥の羽音に似ていた。そのあいだから、ところどころ脱色された本が落ちた。高橋を「正義の味方」超人マンに変えた呪文、『ゴーストバスターズ』であった。

「金之助さん——」

奈留は金之助の名前を呼んだ。魔法を使える相手に対処するには、魔法が使える者が行くしかないという決意が、小さな背中ににじんでいた。

金之助は高橋の横を通って、断崖と化した窓際に立った。一歩先には空中が広がっている。

「月ノ夜さんたちは早く逃げてくれ。警察が来たら面倒なことになるから。俺もなるべく早く、家に帰るようにする」

「高橋さん、危険な目に合わせてすみませんでした。できれば、怪獣のことも、空を飛んだことも、夢だと思つて忘れてください」

杖は、金之助の両肩の震えが伝わって、小刻みに揺れていた。震えの正体は、紙袋に詰まった本の重みではなく、恐怖であることを、奈留は知っていた。

「金之助さん、気をつけてくださいね」

「ありがとう。それと、さつき言いかけたこと、やっぱり言わせてくれ」

「ずっと、ぼくの言葉で呼びたかったんだ——行つてきます、奈留さん」

金之助は奈留の名前を呼んだ。

振り上げられた陰の杖と陽の杖が、ビルの外の空間で

ぶつかる。金之助の姿はかき消え、あとには一冊の本が残った。奈留はそれを拾い上げた。題は『距離の暴虐 オーストラリアはいかに歴史をつくったか』とあった。

「そうか、距離を本に変えちゃったんだ」

金之助と相手との距離は、いまやなかった。

4

視界が一切の前置きなしに変化した。金之助はそれを考える前に、盲目的に両手の杖を振り上げ、再びぶつけた。魔法が正しく作用しているなら、金之助は草薙と密着しているはずだったからだ。

「おおっと!!」

草薙は軽業めいた動きで杖をかわし、素早くずっと後ろへ下がった。白い髪の毛が一呼吸遅れて着地する。

「ふう：いやいや

^{あゝ}

危なかった

プログラム！
『BLAME!』の
魔法をさつき使ってなかったら
その攻撃避けられなかったぜ」

金之助は改めて周囲を見回した。貯水タンクや低くうなる空調設備が並んでいて、上には夕空が見える。SUNテレビの屋上であった。辺りを囲む薄気味悪い青白い光は、空中に浮かんだマンガのコマが放っていた。草薙の模写したコマが、風船のように宙にとどまり、ところせましと並んでいるのだった。

「なんだよこれ。なんでこ
んなにたくさんあるんだ」
「これがあなたの魔法ですね。描いた絵が現実になる」
別々に動く二つの口を見上げて、草薙は身をかがめながら笑った。

「なんだ その顔…
気色悪いな」

手を休めず、草薙は自分のまわりに新たな絵を描いてい

く。人間の背丈ほどもある巨大な杖、ガンマウイツツの筆先が、青い光を空間に刻んでいた。

「教えてやろう」

この正朔の杖“ガンマウイツツ”は
描きかけのコマをいくつも

キープしておけるんだ」

「あとから少し描き足せば、一度に大量の魔法を使えるわけか」
「でも、自分が動いても絵は動かないんですね。ここに残った絵は使えません」

金之助はそばにある絵から順に、杖ではさんで消していった。はばたくように何度も腕を動かすと、絵は次々と本に変化し、屋上にばらまかれた。

「無駄？ とんでもない」

ちょうどいい時間稼ぎだ」

草薙の手が痙攣のように動き、空中に細かな線を描き出していく。

「^{かんせい}ほら完成だ ^{しゅつてん}こいつの出典は
Last Order
『銃夢』っていう
マンガ!」

青白い絵の光が強烈になった。金之助がまばたきをした直後、草薙の右腕が変形をはじめた。内部に現れた機械構造が露出する。腰に湧き上がった直方体をつかみあげ、脇のあたりに差しこむと、片腕は完全に大型の銃へと変わった。砲口のまわりで放電が音をたてる。飛び回る虫のように不快な音が、だんだんと強くなっていく。

「ミラン・クンデラは、
『存在の耐えられない軽
さ』で、こう書いているぜ
——『そしてサビナの前に
裸のまま、武装解除されて
立った。』」

金之助の左手の紙袋の中から、小さな本が銃弾のような

「全能に近い者どうしが戦
うとき、その勝ちかたは一
通りです。最初の一撃で決
めるか、あと出しで相手の
動きをリセットして、状況
を振り出しに戻すか」

勢いで飛び出した。黒い杖頭の表紙が開き、その本を飲みこむ。すると、放電の眩しさが、草薙の右腕、すなわち ²²口径超伝導相転移砲から、次第に失せていった。光とともに機械構造も、そして草薙の灰色のダウンジャケットも、また剥落していく。冷や汗を浮かべながら、草薙は叫んだ。

「ちっ…くしょう

キサマ ^{へんたい}変態かよ

だが俺の ^ま真の ^{しん}狙いは

こっちだ!」

草薙は鼓動のように赤く発光する杖を、コンクリートの床に殴りつけ、その勢いで体を横に倒し、大きな室外機の陰に転がりこんだ。

「俺には ^れ時間 ^{じかん}が たっぷりあった

この ^かへんにもたくさん

描きかけのコマを

しこ
仕込んでおいたぜ!!」

金之助は宙に浮かぶ絵の中を突進した。左手のコーカイ
ティルゼは、まだばさばさと音をたてており、『存在の
耐えられない軽さ』を飲みこみきれてはいない。

「させるか。俺はお前には
ぜつたいに負けない。マン
ガの絵を現実^{マニ}に再現するの
と、脈絡関係なしに抜き出
した文章を使うのとじゃ
あ、応用力が段違いだ。こ
れだって、作中では飛びか
かって突く話だが、こんな
ふう^{マニ}に投げることだって」

「岡本綺堂は、『利根の
渡』で、こう書いています
——『そう決めてから、ひ
まさえあれば針で物を突く
稽古をしていると、人の一
心はおそろしいもので、し
まいには一本の松葉でさえ
も狙いをはずさずに突き刺
すようになりました。』」

右手のコーカイティマスが白銀にきらめいた。紙袋から
また別の本が飛び上がり、走る金之助の背中を一つ跳ね
て、杖頭の光彩の中に消えた。金之助の手元に、マツサ

ージに使うような太く長い針が落ちてくる。紙袋を二つ
とも左手でまとめて持ち、空いた右手で針を受け止めた
金之助は、速度を緩めずに腕を振りかぶって、針を室外
機に向けて投げた。針は回転せず、尖った先をびたりと
前に向けて飛び、室外機のわずかな隙間を通り抜けた。

「こいつの出典は
ドラゴンボール
『DRAGON BALL』っていう

マンガ!

うがっ」

草薙がうめいた。金之助は自分の足音や紙袋のがさつき
を気にしながら、眼球に針が刺さって苦しんでいるはず
の草薙の姿を確かめようと、室外機の裏側へ急いだ。

草薙は上半身の衣服と頭髪を失って、あらわになった
額を手で押さえていた。魔法によって身長が大きく伸び
ている。両目で金之助を見下ろしながら、草薙は手を外
した。ぎらぎらした表情に、汗の玉が一つ流れた。

「^い痛え…

だが^{ざんねん}残念だったな

この^{てんしんはん}天津飯には

眼^{がんきゅう}球^みが三つあるんだよ」

金之助の投げた針は、草薙の額に現れた眼球に突き刺さっていた。草薙は針を引き抜いて、屋上から投げ捨てた。急激に盛り上がった肩の筋肉がうごめく。

「^はかめはめ波みたく

はねかえして

やろうかと

^{おも}思ってたが」

「^{ひつよう}その必要も

なかったな」

金之助は舌打ちを二つ同時にした。

草薙は筆の形をした杖の先端を金之助に向けた。どぎつく点滅する杖の光は夕日をかきけし、二人の影を大き

く作った。金之助も、二つの紙袋を両手で分けて持ち直し、残っている本のうちにある記述を吟味した。

「^むいいこと教えてやる

マンガでは

『^おこれで終わりにしてやる』

とか^い言うかわりに」

「^いこう言うと たいてい

^か勝てるんだぜ…」

草薙は杖を構えたまま、右足を引いた。コンクリートに運動靴がすれる。背後にはまだ大量の絵が浮かんでいる。

「『^{こうげき}この攻撃に ^{すべ}全てを賭ける』

なんてな！」

温度の低い乾いた風が、金之助のコートを煽る。

「攻撃と防御の両方が一度に」 「ホイへ・ルイス・ボルへ
できる俺に、負けはない」 「^はスは——」

「^う受けてみる ^{しんしゅん}新春マンガ祭り^{まつ}!!

最新号に載ってるマンガを全部一気に現美化
「ウルトラスーパーヤングビジネス少年Vジャンプ!!!」

滑稽にも後ろ向きに走りながら、草薙は正朔の杖、ガンマウイツツを振り回した。草薙の背後に描きかけのまま放置してあったコマは、数枚どころではなかった。何十段にも連続して配置されたコマに、草薙は後退しながら杖を一振りずつ裏側から加えていく。病的な輝きが連続して爆発する。炸裂のたびにマンガが完成し、武器、怪物、人間、自然現象が次々と立ち現れ、金之助に襲いかかった。金之助は慌てて二つの口で朗読を速めた。

「『神学者たち』で、こ——「う書いています——」
金切り声と咆哮と轟音と銃声と静かな宣告と荒れ狂う炎と吹きすさぶ嵐と涙と笑顔と欲望と金と車が、金之助の小さな声を打ち砕いた。

屋上のへりまで後退し、用意しておいたコマの大半を完成させて使いきった草薙は、ガンマウイツツを鞘に収めるように操って、露出した自分の脇腹を軽く叩いた。

すると、盛り上がっていた筋肉が萎び、頭には美しい光沢のある白い髪が戻ってきた。額にできていた第三の眼球もなくなり、灰色のダウンジャケットが体を覆った。

「うう：^{きすが}流石に寒^{きむ}かった だが
これで ^む俺^かの勝ちだ」

生み出したマンガの世界の住人たちにのんびりと歩み寄りながら、草薙は杖を両手で持つて背伸びをした。

「人^{ひと}によ^{さいう}っちゃ ^{しかた}最高の死に方かもな
マンガのキャラに殺^{ころ}されるなんて」

「少なくとも俺は、そんな
冗談はまっぴらだ」 「重量を持たないものに殺
されるなんて、ね」

気持ちよく上を向いていた草薙の笑みが硬直した。瞬時に汗が顔に浮き出て、感情の表れを補強する。上空から、金之助が垂直にゆつくりと舞い降りてきていた。力を抜いて垂らした右腕の杖が、猟奇的な色彩を放って、金之助の悪鬼じみた顔を、下から照らした。左の杖は夕闇に

溶けこんでしまっており、どれほどの長さがあるのか、容易には見分けられなかった。

肉体の重みをずつしりと鉄板に預け、金之助は貯水タンクの上に降り立った。

『おそらく彼らはモノトすべての人は一人であり、分であつて、こちらは天上う。彼らはまた、われわれていればそのもうひとりのすればもうひとりの自分は働けばもうひとは気まえた影を投げるものだとも想には、われわれは「のもうなるであらう。『ホルクス』

「^{まう}そうか・^{ざんしん}要するに分身を作つて
^にうまく逃げたわけだ」

「ノス派の邪説に染まって、真の自分はもうひとりの自にいと想像したのであるの行為は、われわれが目ざめ自分が眠り、われわれが姦淫貞淑であり、こちらが盗みをしていいというふうには、倒立し像した。われわれが死ぬときひとりの自分と合体し、彼との『神学者たち』です」

草薙は髪をかきあげながら、低く笑つた。

「それで？ これからどうする！？」
時計を見ながら考えな！」

左袖をまくりあげた草薙は、腕時計の表示を金之助に見せつけた。五時まではあとわずかだつた。

「『ギーガーズ・エイリアン』で、ハンス・ルーデ
イー・ギーガーは、こう
「無駄だよ 何をしようと
キサマの魔法は
五時でおしまい：タイムアウトだ」
だが俺の”マンガの魔法”には
時間制限が無いんだよ！」

金之助は早口で呪文の書物を読みはじめた。

「無駄だよ 何をしようと

キサマの魔法は

五時でおしまい：タイムアウトだ」

だが俺の”マンガの魔法”には
時間制限が無いんだよ！」

青ざめる金之助の顔の半分が、コークイティマスの光で紫に色づく。せわしなく動く分かれた舌は、のたうちまわるナマコのつがいのようだつた。

草薙の哄笑は、SUNテレビの下の道路まで響いた。

「じゃあな ^{キンノスケ} 金之助……」

草薙は杖を振った。無数の質量のないマンガたちが、貯水タンクに群がり、飛び上がり、這いのぼった。いくつもの手が触れる直前で、金之助の姿はかき消えた。落ちた紙袋は、中身ごと無残に引き裂かれ、燃えた。

腕時計の軽薄なアラームが鳴った。五時であった。

「ふん ^{まほう} ^お どこへ逃げようと
魔法で追いかけて……」

突然、草薙は声を出せなくなり、反射的に胸を押さえた。目が血走り、大きく見開かれる。悪寒がせりあがり、むくんだ舌が不自然に突き出た。全身を震わせながら仰向けに倒れた草薙の胸が、女性のように大きく膨らみ、そして、はじけた。

草薙の胸を、悪鬼が内側から突き破ったのだった。外に出た悪鬼は、衣服から草薙の血液をぼたぼたとこぼし

た。大きく裂けた口が、ちぎれたジャケットを吐き出した。肺から片足を抜き取りながら、殺人者は赤黒く濡れた顔で、草薙を見下ろした。二人の表情はともに蒼白だったが、その上に血液が上塗りされていた。

「……『子宮』から外に出たくなつたチエストバスターは、宿主の胸を食い破つて自由への道を切り拓くのだ。H・R・ギーガー、『ギーガーズ・エイリアン』」
金之助は自分の左のこめかみを強く殴った。髪についての血が、拳にべつたりと粘着した。

「これが、ひとの肉の感覚なのか。ぼくは殺した——どうして気がつかなかつたんだ、こいつだつて人間だ。いままで相手にしてきた都市伝説とはわけが違うのに」
草薙には自分を殺したものが何を言ったのかは聞き取れなかった。それは金之助のひどいどもりのせいでもあり、意識が朦朧としているからでもあった。

——そうか……金之助は最後の魔法で……小さくなつ

て俺の胸に……入りこんだ……五時になって魔法が解けると……金之助の大きさはもとに戻る……俺の小さな胸のうちになんか収まらない人間に……。

おぞましい推測は当を得ていた。草薙は最後に一度大きくわなないて、死んだ。

5

怪獣を見物しようとする人々を、警官が拡声器を使いながら制止している。いまあるのはただのプルトップの山だが、その山の中にまだ何かいるのではないかというささやきが、直矩の耳にも聞こえてきた。

道路にあふれた群衆のせいで、車両はほとんど動いていない。緊急車両でさえも、警官の呼びかけに応じて人々が道を空けなければ入ってこられないありさまである。

サイレンや喧騒から遠ざかるように、直矩は歩いた。

ポケットに入れた世界の王権を右手でもてあそぶと、にやつきが抑えきれなかった。

周囲に人影が途絶えたところで、直矩はレンガの壁にもたれて、黒く光る幽玄の杖、エンドフアーフリを取り出し、煙草のように二本の指ではさんでみた。しばらく手の中の筒を眺めていると、直矩にはそれが、非常に丸い滑らかさを持っていることがわかった。実際、オルシアンがやっていたように、手のひらで転がしていると、ひんやりとした心地よい感触なのだった。

階段を下ってくる足音に反応して、直矩は杖をまたポケットにしまった。陶然としていた意識を目の前に戻すと、月ノ夜奈留が背の高い少年と並んで降りてくることになるだった。

「——直矩さん？」

直矩は片手をあげて応じた。

「おお、奈留さん！ 無事なのですね。ということは、

金之助はうまくやりおおせたわけだ」

「それが——いろいろあって、金之助さん、もうひとりの魔法使いを倒すって言って、どこかへ行っちゃったんです。もう五時すぎなのに、連絡してくれないし、電話かけても出ないんです」

奈留は薄く涙を浮かべた瞳で、直矩を見上げた。鼻の頭が赤くなっているのは、寒さのせいだけではない。

直矩が何を言おうか考えていると、奈留の隣で少年が言った。

「出ないのは、回線が混んでるせいかもしれないんですよ。時間おいてかけなおしてみたほうがいい。それで、月ノ夜さん、このひとは？」

角ばった顔の少年に、直矩は自分から先に手を差し出した。

「二宮直矩です。金之助の兄です。よろしく。奈留さんとは、家がわりと近所ですわね」

少年は慣れない挨拶にわずかにためらっていたが、すぐに握手を返し、丁寧に頭を下げた。

「高橋作也と申します。月ノ夜さんと同級生です」

握手を交わした手を、今度はベストのポケットに入れ、直矩は青い薄型の携帯電話を取り出した。

「とりあえずメールも送ってみたんですけど、やっぱり返事ないんです。心配で——」

「私からも送ってみましょう。契約している会社が、金之助と私とで同じですから、届きやすいかもしれません」

奈留をなだめながら、直矩は金之助に携帯電話のメールを送った。

——どうした。奈留さんに会えない事情ができたか？

ボタン操作を終えると、直矩は奈留たちの顔を交互に見た。

「もう帰ったほうがいい。金之助の身に何か起きたとす

るなら、まだ危険なものが現れる可能性は残っていますからね。ここから離れたほうが、少しは安全です」

「そんな、私、心配です。金之助さんに何かあったってことは、たぶん——」

そのとき、直矩の携帯が振動した。

「金之助さんですか！」

奈留は飛びつくように顔をあげた。直矩は携帯電話を左手で操作し、着信したメールを見た。

——またひとを殺してしまった。全身血まみれでSUNテレビ本社屋上にいる。怪我も。

顔色を変えずに、直矩はポケットの中の魔法の杖を握りしめた。そして、一つの簡単な物語を考えながら、奈留に携帯電話の画面を見せた。

「ええ、金之助でした。あいつもばかなやつです」

画面には、金之助の送った文面ではない文章が表示されていた。

——服が破れてしまったので人前に出られない。月ノ夜さんからメールが来たが、どうやって返事をしたらいだらうか…？

直矩の魔法によってできた文章を見て、奈留の顔はほころんだ。

「なんだ、そんなことだったんですね。よかった」

「幸い車で来ていますから、金之助を拾って帰りますよ。すみませんが、奈留さんたちは電車で帰ってください」

高橋が苦笑しながらうなずく。奈留も自分の携帯電話をバッグにしまつて、落ちかけていた涙を指先でぬぐった。

「わかりました。怪獣とか、みんなに見られて、すごいことになっちゃいましたけど——気をつけて帰ってくださいね」

「ええ。これはちよつと揉み消すのは難しいでしょうね……それじゃ。あとで金之助から電話させますよ」

奈留と高橋は一礼して、人通りの多い駅のほうへと歩い

ていった。その背中を視界から消えるまで見送ってから、直矩はまた杖に触れた。

タウニキヤ
「二宮さん」

すぐ背後から、高低の定まらない声がした。息を呑んで振り向くと、オルレアンの顔がすぐそばにあった。直矩は喉だけの悲鳴をあげて、即座にあとずさった。

「オルレアン——なぜここに」

太った西洋人は直矩をじっと見た。オルレアンは、自身の力の源を直矩に引き渡し、物語から退場したはずだった。その口ひげが芋虫のように動いて、直矩を圧倒した。

「今さら杖を返してもらいに來たわけではないよ。ただ私は氣になることをいくつか抱えているんだ。

タウニキヤ
「二宮さん、いったいきみは、どこまで私のたくらみを察知しているんだ？」

直矩は杖を握って胸元で抱えた。

「たくらみだと？ 物語と現実を自由に交換できる俺に、

たくらみなど通用しない」

その言葉と行動を見て、オルレアンは愉快そうに目を丸めた。

「それではあなたはなんにもわかっていなかったわけだ！ 常に都市伝説であることにこだわりつづけるはずのベルチエ・レオンが、きみとの会見のあいだ、一つもフランス語を交えなかったことにも！ さらにまた、フランス語を母語とするベルチエが、きみのことを直矩さんと呼んだことにも！ マ・デプロラブル 嘆かわしい！ 言語を武器とする人間でありながら！」

オルレアンは声を張り上げた。夜会服に包まれた肥満体が、直矩の周囲を囲んでいくようであった。

「そうか——フランス語は英語とは違う。敬称は名前ではなく、苗字につけるんだったな」

「つまり、オルレアンは実在するのだ、ベルチエ・レオンとは別に、ム・ヌ・レジェンド・ユグ 都市伝説として」

「じゃああの男はなんなんだ。俺にこの魔法の杖を渡したレオン・ベルチエは」

ダクト・マジック
「魔法の杖？ そのウラン鉱石のことかね」

途端、直矩は猛烈な脱力感に襲われ、膝をついた。毛髪が続々と抜け落ち、路面についた手を覆う。

「ウラン……」

「贈られた宝石が、実は放射能という呪いを秘めていた——なんていう都市伝説は、初耳かな？」

もちろん直矩はそれを知っていた。直矩は変色していく手で、幽玄の杖、エンドフアーフリを放り投げた。黒い小さな棒は、オルレアンの足元に転がっていった。直矩は荒い息をついて、拳銃を取り出した。

「都市伝説である私が放射線の影響を受けるはずはないだろう。もちろん、銃弾だってね」

熱線を放つような目で、直矩はオルレアンの蝶ネクタイに照準を合わせた。狂いはわずかだった。オルレアンが

眉を上げる。

「俺はむかし、国籍を中国とか偽って、紛争地帯のゲリラに雇われに行ったことがある。執筆に必要な体力や精神力を養うためにだ」

「日本人にしては拳銃の握りかたがまともだと思っていたよ。ところで、撃ちかたに関する都市伝説は知っているかな？」

オルレアンの灰色の瞳が、野犬に近づく直矩の視線を受け止めた。

「多くの一般人は、拳銃とは銃口を相手に向けて引き金を引けば弾が当たるものだと思っている。だがそれは、当局が犯罪抑止のために流している^{リヌメル}うわさにすぎない。実際には、銃はこうやって撃つんだよ」

太い人差し指を拳銃になぞらえ、オルレアンは自分のこめかみに指を当てた。

「こうして自分の頭に銃口をつけて、引き金を引く。す

ると狙った相手が倒れる」

「そんなふざけた話があるかよ」

銃の安全装置は、すでに外れている。直矩は弱った指を引き金にかけ、力をこめた。銃声が響く。しかしオルレアンは動じなかった。

「ほら、私の言ったとおりだろう。きみは都市伝説に踊らされているんだ」

「ばかばかしい、そんな即興の作り話、実際に銃を撃つた経験がある俺には無意味だ」

発射の反動で銃を取り落としそうになった直矩の腕は、じりじりと下がりはじめていた。被曝していく体は、死に接近している。

「経験がある——そう言っただけで都市伝説を信じようとする者が、どれだけいることか！ きみだって知っているだろう、自分はホルマリンの水槽で死体を洗ったことがあるなんて言い張るやつ」

「銃の構造だって、ちよつと考えれば、わかる」

直矩の視界に混濁が生じはじめていた。オルレアンの丸い鼻がいくつにも見える。

「きみは都市伝説をまだ理解していないのかい？ きみたちが科学的常識として疑っていなかったもの、まさにそれこそ、都市伝説なのだよ。人間はけつきよく、何かを盲目的に信じるほかない。その信仰の先が、確かな真実である保証がどこにある？ どこにも！ ^{ニユル・パル}すべては不確かなうわさ、都市伝説でしかない」

銃口はいつしか、直矩自身の額に押し当てられていた。

金属が熱かった。自分で額に烙印をつけているようでもあった。

「そうだ、撃て、二宮」

直矩の感覚が額に収束していく。直矩はいったん強くまぶたを閉じた。

弾丸は正確に運動し、オルレアンの足元の小さな杖を

粉碎した。破片は吹き飛ばずにその場でくるくると回転した。

「^{メルド}くそつたれ！」

オルレアンの中からもうひとりのオルレアンが現れた。急速な脱皮を見るようでもあった。

「お前がヘデモナから授かった力、それは、語られたことを現実にする力だ。つまり、その黒い塊は、お前が語った瞬間、魔法の杖になり、さらにまたウラン鉱石にもなった。魔法の杖は完璧に頑丈だが、お前はそれを鉱石だと言った。それなら銃弾で傷つけられる」

直矩の体から異常が消えていた。魔法は終わったのだった。レオン・ベルチエから出てきたオルレアンは、空中に磔刑のように固定された。

「オルレアン、ほんとうはお前自身が、意思を持った魔法の杖、エンドフアーフリだったんだな」

オルレアンの身体が反転し、なくなった。レオン・ベル

チエが震えながらその場に残っていた。

直矩は立ち上がって、金之助がいる場所へ向かった。

6

直矩と金之助は苦勞して帰宅した。金之助が服を着たままシャワーを浴びると、浴室はぞつとする赤色に染まった。臭いに辟易しながら、直矩は車と家の掃除を言いつけた。金之助は虚ろな返事をした。

直矩は別の浴室で汗を流してから、書きかけの小説作品をいくつか仕上げた。しかし金之助は浴室から出てこなかった。翌朝、直矩が報道の状況をあれこれ確認していると、金之助はやつと居間に出てきた。顔色はわずかに紅潮していたが、湯あたりしているふうではなかった。

腕の傷に新しい包帯を巻きながら、金之助は言った。頬には傷がなかった。

「…ぼくは……殺人を犯した」

「これで二度めだな」

死体は今ごろは処理が終わっているはずだった。怪獣の不幸な獲物として。

「…二度め……はたしてそうだろうか？」

「おいおい、忘れたわけじゃないだろう。お前は俺たちの親を、ヘテモナに操られてとはいえ、お前の手で殺したんだぞ」

金之助は包帯を巻く手を止めて、手のひらをじっと眺めた。細かいしわのあいだまで、入念に洗い流したが、それでもどこかに血液がこびりついているような気がした。

金之助はようやく口を開いた。

「…ぼくは…両親を……殺した…のか。…僕は……覚えていないんだ」

「当たり前だ。お前の意識が消えているときのことだったんだからな」

ソファに腕組みをして腰かけている直矩に、金之助はお

どおどした目を向けた。

「…でも……意識がな…かった……とはいえ、…殺した……感触…まで、……忘れ去…れるだろうか？ …あんな…不気味な感触……肌が覚えて…いない……なんてことがありうるだろうか？」

「何が言いたい」

「一晩じゅう浴槽の中でもてあましていた思いつきを、金之助は口にした。

「…ぼくが…父さんと……母さんを殺した…つて言っている…のは、…兄さん、…お前だけだ。…ヘテモナ…自身でさえも、…そんなこと……言っていない」

「要するに、俺がお前をずっとだましてたと思ってるんだな？ もつと言え、俺が交通事故に偽装してじやまな両親を殺し、蘇ってきたふたりをもう一度殺し、ヘテモナと共謀してお前にそれをなすりつけ、さらには罪の意識を与えてお前から言葉を奪い、魔法の力すらも俺の

手元で支配しようとした、そういうことだな？」

直矩はべらべらとしやべった。金之助は震えて、喉の奥から奇妙な声を洩らした。

「…ぼくは……そこまで考えてはいなかった」

金之助はしばらく黙った。ときどきまた包帯を巻きはじめたが、いつもすぐに中断してしまった。長い時間が過ぎた。包帯はついに終点に来た。

「……わからない。…でも…たととしても、……お前に頼みたいことがある。…ぼくは…ぼくの……落ち着ける…足場だった…世界を……取り戻さなくては。……そのために今は……お前を…信じる」

そのとき、直矩ははじめて戦慄した。殺人の告発よりも、自分が盲目的に信奉されているということが、直矩をおのかせた。それはとりもなおさず、直矩自身が都市伝説となりうる、ということだった。

腕組みを解くことができなかった。やつのことで、

直矩は言った。

「——何をしてやればいい」

「……新人賞創設。…へデモナ…をなくす…ために」

7

二月十一日の夕刻、月が姿を現しはじめたころ、広場には続々とバスが到着していた。開発の初期に放り出され、いまでは野球場ほどの漫然とした土地があるばかりである。スタンドがないぶん、野球場よりはだいぶ開放的であった。ここにぎっしりと並んでいるのは、直矩がでつちあげた小説の新人賞に応募した、さまざまな作家志望者たちだった。

「すごい——こんなにいるんですね」

奈留は近くの丘からざわめきを眺めていた。金之助はその隣で、暗い情熱にあふれた人々の顔を、双眼鏡でひとつひとつ見ていた。中には文芸誌や新聞の取材に来た人

間もいるようだった。

白い簡易テントの受付が、最後の応募者からその作品を受け取り、整理札を渡した。金之助は手袋を外して、足元のリュックサックから本を取り出した。

『みなさん！ 寒い中お待たせしました』

応募者たちの前方に組まれた即席の檯から、直矩の張りのある声が、拡声器を通過して響いた。

直矩が小さな出版社と結託してつくりあげた小説新人賞「ツインペレス賞」は、小説の長短や完成の具合さえも完全に無視した破格の小説賞であり、その第一回の受賞者は、この片田舎の空き地に集まった者から選ばれることになっていた。旅費は直矩が負担している。応募者たちは手に手に自分の自信作を握りしめてやってきた。軽い気持ちで出向いた者もいれば、うさんくささの正体を見極めるために来た者もいたが、彼らはみな、なにがしかの形で小説という魔力に吸引されているには違いな

かった。はじめのうち、冷めた視線を投げかけていた者も、いつしか集団の熱気に気おされはじめていた。

直矩が口上を述べているうち、時刻は四時になった。

金之助が奈留をちらと見た。

「だいじょうぶですよ、なんていうか——こんなに大勢来てるんですから。うまくいく気がします」

「そうだね。……奈留さんが、そう言うなら、そうなん……だと思う」

金之助はいまでは、あまり引用に頼らずとも、会話を交わすことができた。ぜつたいに言い間違っわけにはいかない呪文、それを覚えるため、奈留とともに繰り返し唱えているうちに、いつのまにかどもりは減っていた。

奈留は金之助と声を合わせて、朗読をはじめた。

「筒井康隆の『バブリング創世記』には、次のようにある——」

そのとき、静かに熱狂していた小説家志願者たちが、

姿を現した私を見つけた。信じられない。

「……読者だ！」

「読んでくれるんだ、僕の小説を——」

私の意思に反したことが起きていた。彼らは明らかに私に気がついていて。

金之助はほくそえみながら、朗読を続けた。遍在する超越者である私、すなわちヘデモナは、金之助が何かを起こそうとしているのに気づいて、この場所に偏在しているのだった。

「『第一章

ドンドンとはドンドコの父なり。ドンドンの子ドンドコ、ドンドコドンを生み、ドンドコドン、ドコドンドンとドシタカタを生む。』」

奈留にも、おぼろげながら私の存在が感じ取れた。私は、世界の作者ではなく、読者——金之助の考えが正しいのなら、ここに集った読者を待つ人々の熱気が、私の

姿を浮き上がらせているのかもしれないなかった。

「『ドシタカタ、ドカタシタンを生めり。ドシタカタ、ドカタシタンを生みしのうち四百六年生きながらえて多くの子を生めり。』」

ほとんど暗記してしまった奇天烈な文章を、奈留は金之助と声をそろえて読み上げた。

読み手を待つ者たちは、一様にこみあげる衝動にかられ、私に向かって駆け出していた。

「俺の……俺の本を読めえ!!」 「私の文章を理解できないのは読者のレベルです。あなたならこの比喩を理解できるはずですよ」 「なんであんなやつが文壇に認められてるんだ！ あんな程度のならぼくにだって書ける！」 「スヴァジルフエーリつて名前じゃいけないの？」 「おれの初めての小説の、第一章の、前半分の会話文だよ、見てくれよ」 「これならどこに出したって一時予選は通貨するんです。下読みがちゃんと歩み寄って

くれさえすれば」「あんたなら的を得た評価をしてくれるはずだ」「二年間もがんばってる私には、いいかげん私を認めるやつが出てきておかしくない」

有象無象の叫びは要するに、「読んでくれ」と言っているのだった。私は彼らの心を読んだ。

先頭を走ってくるのは、長い腕を振り回すやせた男だった。彼の人生のはじめから、素早く目を通していく。そこにたいした波乱はない。こんな人間の一生など、文章にしてしまえば短編小説にもならない——そう思っていたが、私はすぐに、金之助のたくらみを理解した。大学に入ったころから、男は短い物語の断片をいくつもいくつも綴っていたのだ。私はそれを読まなくてはならなかった。

世の中にある人生は、ほとんどが薄っぺらい物語にすぎないが、そいつらが別の物語を生産しはじめたとき、読者にとって人生は水増しされて膨れ上がる。私が超越

者であると同時に読者であるがゆえに、読み飛ばすことのできない、しかしくだらない物語が加わっていく。私はそれを読むしかない。

私は焦りを覚えながら、一つずつ人生を読破し、読み捨てていった。消費された物語は、読者を求めるのをやめた。作家志願者たちは次々に足を止めていった。彼らは自分の生命が綴ってきた物語の密度の低さを、明白な形で私に突きつけられたのだった。

なぜ、これほど恐怖を感じているのか、私には私の考えが読めなかった。何がどれほど集まってこようと、私を脅かせるわけでもなかった。それは金之助にしても同じことだ。私が金之助に与えた本の魔法は、私が認めなければただの朗読にすぎない。

朗読は順調に続いている。私は私の記憶を読み返した。金之助は私の魔法を呼び起こそうとしているのではなかった。「次のようにある」——私の与えた魔法はコーカ

イテイル、「こう書いている」だ。金之助は何の意味もない朗読を続けているのか？しかし、それでは私を襲うこの予感の説明がつかない。私は何を恐れているのか。

いくつもの本を同時に読み終え、本を閉じ、また別の本に手を伸ばす。私は莫大な物語をむさぼった。私の中に振りこまれた人生が、頭の中で暴れているのがわかった。隙間だらけの人生どもの叫びが、一つになってこたましている。「書きたい」「書きたい」「書きたい」…物語を綴ろうとする切望が、だんだんと私を侵食していく。しかし、私の綴った物語を読むのはだれだろう？常に物語を読みつづける私にとって、私にしか書けないことなどあるのだろうか？私の考えることはすべて、きつとすでに書かれたことなのだ。本の魔法も、マンガの魔法も、そしてついには都市伝説の魔法さえ、私の与えた方法はすべて、何かを引用すること、コピーすることではしかなかった。

金之助と奈留は朗読を終えようとしていた。私は物語の洪水をあおるように飲みながら、筒井康隆『バブリング創世記』の記述を思い返そうとした。

「『注射ミス、ハイミスを生み、ハイミス、ミスとオールドミスを生み、ミス、ミニミスを生み、ミニミス、ミニミスクを生み、ミニミスク、覚醒剤を生み、覚醒剤、徹夜を生み、徹夜、疲労を生み、疲労、事故を生み、事故、野次馬を生み、野次馬、つけ馬を生み、つけ馬、貧困を生み、貧困、信仰を生み、信仰、神を生めり。』」

私がようやくそれを理解したとき、ふたりは最後の一文を唇に乗せていた。

「『神、光あれと言いたまいければサバ、イワシ、コハダ、キス、その他森羅万象有象無象すべて地に充ちたり。』」

朗読は終わり、新たな魔法がはじまった。

「神さまって、いったい——」

景色はあかがね色に染まり、地とも空ともつかぬ場所に、神様は現れた。金之助は奈留の左手を強く握って目を閉じた。

「小説の、神様つついつ……って言ったら、ひとりしかない」

その続きを、内省の苦しみにうなされていた作家志願者のひとりが、ぼつりと言った。

「——志賀直哉」

小説の神様、彼こそが、読者である私の作者だった。金之助のただの朗読が、神との対話の場をつくりあげたのだった。

「志賀直哉！ あなたが世界を創造しつづける作者だというのなら、俺はあなたに頼みがある。いや、それを聞き入れるつもりがあるからこそ、あなたはこの趣向につきあつて、俺の前に現れたんだな」

小説の神様はまだ何も語らない。しかし作者に語らない

ということはいけない。作者が作者であろうとする限り、語らないということ語りつづけなくてはならない。

「綴られた物語の中の登場人物の運命は残酷だ。彼らは読まれるたび、何度でもこの世に立ち現れねばならない。物語が世に残る限り、苦悩や過ちや別れを、永遠に繰り返さなくてはならない。ミヒヤエル・エンデの『はてしない物語』には、次のようにある——『最初からまたはなすということは、終わりなき終わりじや。われらははてることのないくりかえしの環にはまることになる。そこから逃れる^{のが}すべはない。』——だが、ほんとうは最初からまた話す必要なんてない。一度話された物語は消えない。だれかがそれを反芻するとき、登場人物は何度でも、どれほどつらくても、物語を生きなおさなくてはならないんだ」

金之助はどもりや言い間違いを恐れず、奈留の隣で述べていた。両親の死、都市伝説の戦慄、奈留の死、それら

はだれかに読まれるたび、延々と繰り返される。果てることなき輪廻のうちには、もつともよろこばしかった出来事さえ、忌まわしい悪夢に変わるだろう。

少年は奈留の手を握ったまま続ける。

「そして物語は変奏される。ひとりひとりの読みの体験で、俺がほんとうに生きた物語と重なるものは一つもない。俺はこのようにして生きているのに、読まれる俺の心は歪められ、現れるのは幻影だけだ。それは俺じゃないんだ！　さらには物語に新しい枝を生やそうとする者さえいる。ヘデモナ、お前もここに集まった作者たちのうちに見ただろう。別の物語に寄生する物語、その中で俺の人格はねじ曲げられる。そしてその怪物が、いつのまにか俺になり代わるんだ」

いまも飲み干しつつづけている物語の破片の中には、私が以前読んだ物語の勝手な延長も含まれている。

小説の神様は、独特な形をした巨大な眉の下で、黙っ

てまぶたを閉じている。

「何よりも恐ろしいのは、物語はどこかではてるということだ。ページは尽き、語りは枯れる。同じ局面がはてしなく繰り返されることよりもつといやなのは、物語が終わるってことだ。それ以後の俺には何もない、特筆に値することは何も起こらないってことだ。書きおえられた俺の人生の先に、展望はまったくない。将来を絶たれたまま、俺は同じ時を、歪んだ形で何度でも生きなくてはならない」

金之助は興奮して、上擦った声でわめくように言った。

「もうわかるだろう。小説の神様、俺の頼みは、物語を、これ以上だれにも読ませないことだ。そして、だれにも知られず、ひっそりと、この世界を永久に書きつづけることだ。この先の俺の人生は俺のものだ。もうだれも俺を読むな！　だれにも歪められない俺だけの俺を生きること、それが俺の望みであり、情熱という魔法でなしと

げたいことだ」

汗ばむ手で、月ノ夜奈留を握って、金之助は小説の神様と向かい合った。相手の口がゆっくりと動いた。合わせて金之助も、その一文を唱えた。

「志賀直哉の『小僧の神様』には、次のようにある――

――

次のようにある……ツギノヨ―ニヤル……なぞらえるならば情熱の杖か。

「『作者は此處で筆を擱く事にする。』」

8

けれどもこれは続く物語、そしてまた、続くときにはなされることはない。

(了)

参考・引用文献（順不同）

『消えるヒッチハイカー―都市の想像力のアメリカ』 ジャン・ハロルド・ブルンヴァン（訳・大月隆寛、重信幸彦、菅谷裕子 新宿書房

『ドーベルマンに何があつたの？―アメリカの「新しい」都市伝説』 ジャン・ハロルドブルンヴァン（訳・行方均 新宿書房

『メキシコから来たペット―アメリカの「都市伝説」コレクション』 ジャン・ハロルドブルンヴァン（訳・行方均、松本昇 新宿書房

『赤ちゃん列車が行く』 ジャン・ハロルドブルンヴァン（訳・行方均 新宿書房

『大秘密―噂・都市伝説・憶測の真相あばきます』 ウィリアム パウンドストーン（訳・田村義進） ハヤカワ文庫NF

『都市にはびこる奇妙な噂』 桐生静十 光栄カルト倶楽部 編 光栄

『うわさの謎』 川上善郎、佐藤達哉、松田美佐 日本

実業出版社

『屋根裏に誰かいるんですよ。 都市伝説の精神病理』

春日武彦 河出書房新社

『壁女―真夜中の都市伝説』 松山ひろし イースト・プレス

『三本足のリカちゃん人形―真夜中の都市伝説』 松山ひろし イースト・プレス

『死体洗いのアルバイト 病院の怪しい噂と伝説』 坂木俊公 イースト・プレス

『「おたく」の精神史』 大塚英志 講談社現代新書

『定本 物語消費論』 大塚英志 角川文庫

『現代フランス語辞典』 監修・宮原信ほか 白水社

第一話 ミミズバーガー

『鏡花全集 巻四』 泉鏡花 岩波書店

『モルグ街の殺人事件』 エドガー・アラン・ポー（訳・佐々木直次郎） 新潮文庫

『幽霊塔』 黒岩涙香 旺文社文庫

『新約聖書』 日本国際ギデオン教会

『現代日本文学大系九十五巻・現代句集』 筑摩書房

『耳ラッパ―幻の聖杯物語』 レオノーラ・キヤリントン（訳・野中雅代） 工作舎

第二話 トイレの花子さん

『パン屋再襲撃』 村上春樹 文藝春秋

『壇の中の手記』 ジェラルド・カーシュ (訳・西崎
豊) 文芸春秋

『 』 桜井亜美 朝日新聞社

『カフカ小説全集 4 変身ほか』 フランツ・カフカ
(訳・池内紀) 白水社

『世界は密室でできている。』 舞城王太郎 講談社

『夜の姉妹団―とびきりの現代英米小説14篇』 ミハ
イル・ヨッセルほか (訳・柴田元幸) 朝日新聞社

『オルガニスト』 山之口洋 新潮社

第三話 ジェットババア

『オルレアンのおわさ』 エドガール・モラン (訳・杉
山光信) みすず書房

『集英社ギャラリー―世界の文学 2 イギリスI』 ジ
ョナサン・スウィフトほか (訳・中野好男) 集英社

『谷川俊太郎詩集』 谷川俊太郎 ハルキ文庫

『ピアスの白い糸』 編著・池田香代子ほか 白水社

第四話 口裂け女

『道徳戦士超獣ギ―ガー』 漫☆画太郎 集英社マンガ
オールマン

『日本絵巻大成 6 鳥獣人物戯画』 編・小松茂美 中
央公論社

『劇情コモンセンス』 前川麻子 文藝春秋

『不死の怪物』 ジェンシー・ダグラス・ケル―シユ

(訳・野村芳夫) 文春文庫

『デカスロン』① 山田芳裕 小学館ヤングサンデーコ
ミックス

『ツヴァイク短篇小説集』 ツヴァイク (訳・長坂聰)
平原社

『うしおととら』③ 藤田和日郎 小学館少年サンデー
コミックス(ワイド版)

『ゴーストバスターズ』 高橋源一郎 講談社

『蛇にピアス』 金原ひとみ 集英社

第五話 はてつづける物語

『夏目漱石全集3』 夏目漱石 ちくま文庫

『空間と視線―西欧絵画史の原理―』 ジャン・パリ
ス (訳・岩崎力) 美術公論社

『で、でたあ!恐怖の口さげ女』 木暮正夫 (絵・阿部
公洋) 岩崎書店

『口さげ女があらわれた』 中尾明 (画・中村銀子)
岩崎書店フオア文庫

『メリメ怪奇小説選』 メリメ (訳・杉捷夫) 岩波文
庫

『葬儀の日』 松浦理英子 文藝春秋

『距離の暴虐』 ジェフリー・ブレイニー (訳・長坂寿
公) 文芸春秋

『 Last Grand』 瓶勉 講談社アフタヌーン

『銃夢』① 木城ゆきと 集英社ヤングジャ

ンプ・コミックス・ウルトラ

『存在の耐えられない軽さ』 ミラン・クンデラ (訳・千野栄一) 集英社文庫

『ちくま文学の森7 恐ろしい話』 編・安野光雅、森毅、井上ひさし、池内紀 筑摩書房

『ドラゴンボール』⑩ 鳥山明 集英社ジャンプ・コミックス

『ウルトラジャンプ』 集英社

『スーパージャンプ』 集英社

『ヤングジャンプ』 集英社

『ビジネスジャンプ』 集英社

『週刊少年ジャンプ』 集英社

『月刊少年ジャンプ』 集英社

『Vジャンプ』 集英社

『不死の人』 ホイヘ・ルイス・ホルヘス (訳・土岐恒

二) 白水社 H.R.

『ギーガーズ・エイリアン』 ギーガー (訳・田中克己) 河出書房新社

『筒井康隆全集』 筒井康隆 新潮社

『はてしない物語』 ミヒヤエル・エンゲ (訳・上田真而子、佐藤真理子) 岩波書店

『志賀直哉』上下 阿川弘行 岩波書店

『志賀直哉小説選 二』 志賀直哉 岩波書店